



ソフトバンクグループ株式会社

2023年3月期 決算説明会

質疑応答

2023年5月11日

免責事項

本資料は、ソフトバンクグループ株式会社（以下「SBG」）及びその子会社（以下 SBG と併せて「当社」）並びに関連会社（以下当社と併せて「当社グループ」）に関する関連情報を提供するものであり、すべての法域において、いかなる証券の購入又は応募の申込みを含む、いかなる投資勧誘を構成又は形成するものではありません。また、本資料は、Arm Limited が発行する証券の購入または応募の申込み、またはその勧誘を構成するものではありません。あらゆる証券の購入または応募の申込み、またはその勧誘は、1933 年米国証券法（改正法も含む）およびその他の適用証券取引関連法令に従い登録制に基づき行われます。

本資料には、当社グループの推定、予測、目標及び計画を含む当社グループの将来の事業、将来のポジション及び業績に関する記述など当社グループの将来の見通しに関する記述、見解又は意見が含まれています。将来の見通しに関する記述には、特段の限定を付すことなく、「目標とする」、「計画する」、「確信する」、「希望する」、「継続する」、「期待する」、「目的とする」、「意図する」、「だろう」、「かもしれない」、「であるべきである」、「したであろう」、「できた」、「予想する」、「推定する」、「企図する」若しくは類似する内容の用語若しくは言い回し又はその否定形などが含まれています。本資料に記載されている将来の見通しに関する記述は、当社グループが本資料の日付現在において入手可能な情報を踏まえた、当社グループの現在の前提及び見解に基づくものです。これら将来の見通しに関する記述は、当社グループのメンバー又はその経営陣による将来の業績を保証するものではなく、当社グループのビジネスモデルの成功、当社グループの資金調達力及びその資金調達条件の影響、SBG の重要な経営陣に関するリスク、当社グループの投資活動に関する又はこれに影響を与えるリスク、SB ファンド（下記で別途定義）並びにその投資、投資家及び投資先に関するリスク、ソフトバンク株式会社及びその事業の成功に関するリスク、法令・規制・制度などに関するリスク、知的財産権に関するリスク、並びに訴訟を含むこれらに限られない既知及び未知のリスク、不確実性その他要因を含み、これらの要因により、実際の当社グループの実績、業績、成果又は財務状態は、将来の見通しに関する記述において明示又は黙示されている将来の実績、業績、成果又は財務状態と著しく異なる可能性があります。当社グループの実績、業績、成果又は財務状態に影響を与える可能性のあるこれら及びその他の要因については、SBG のホームページの「事業等のリスク」

https://group.softbank/ir/investors/management_policy/risk_factor）をご参照下さい。当社グループ及びその経営陣は、これら将来の見通しに関する記述に明示されている予想が正しいものであることを保証するものではなく、実績、業績、成果又は財務状態は、予想と著しく異なる可能性があります。本資料を閲覧する者は、将来の見通しに関する記述に過度に依拠してはなりません。当社は、本資料に記載される将来の見通しに関する記述その他当社が行う将来の見通しに関する記述を更新する義務を負いません。過去の業績は、将来の実績を示すものではなく、本資料に記載される当社グループの実績は、当社グループの将来の実績の予測若しくは予想の指標となるものではなく、又はこれを推定するものでもありません。

本資料に記載されている当社グループ以外の企業（SB ファンドの投資先を含みますが、これに限られません。）に関わる情報は、公開情報等から引用したものであり、当社は、情報の正確性又は完全性について保証するものではありません。

本資料には、Arm Limited に関する記述が含まれています。これらの記述は、SBG の株主への情報提供のみを目的としたものであり、Arm Limited が発行するあらゆる有価証券の販売又は購入の勧誘を目的としたものではありませんし、そのように解釈されるべきではありません。

商標について

本資料に記載されている企業、製品及びサービスの名称は、各企業の商標又は登録商標です。

重要なお知らせ—SBG の普通株式の取引、スポンサーなし ADR（米国預託証券）に関する免責事項

SBG の普通株式の売買を希望する場合には、当該普通株式が上場され、主に取引が行われている東京証券取引所において売買を行うことを推奨します。SBG の開示は、スポンサーなし ADR（以下「ADR」）の取引の促進を意図するものではなく、ADR の取引判断を行う際にこれに依拠すべきではありません。SBG は、SBG の普通株式に関するスポンサーなし ADR プログラムの設立又はそれに基づき発行される ADR の発行若しくは取引について、過去及び現在において、参加、支援、推奨その他同意を行ったことはありません。SBG は、ADR 保有者、銀行又は預託機関に対して、(i)SBG が 1934 年米国証券取引所法（以下「証券取引所法」）で定めるところの報告義務を負うこと、又は、(ii)SBG のホームページに、SBG が証券取引所法ルール 12g3-2(b)に従って証券取引所法に基づく SBG の普通株式の登録の免除を維持するために必要な全ての情報が継続的に掲載されることを表明するものではなく、また、当該者又は機関は、そのように信じてはなりません。適用ある法が許容する最大限の範囲において、SBG 及び当社グループは、SBG の普通株式を表象するスポンサーなし ADR に関連して、ADR 保有者、銀行、預託機関その他企業又は個人に対するいかなる義務又は責任を否認します。

上記の免責事項は、ソフトバンク株式会社や Z ホールディングス株式会社などの、スポンサーなし ADR プログラムの対象であるか又は将来対象となる可能性のある当社グループの証券に同様に適用されます。

本資料に記載されるファンド情報に関するお知らせ

本資料は、情報提供を目的として提供されるものであり、法律上、税務上、投資上、会計上その他の助言又は SB Global Advisers Limited（以下「SBGA」）、SB Investment Advisers (UK) Limited（以下「SBIA」）及びそれらの関係会社を含む SBG の子会社（以下併せて「SB ファンド運用会社」）により運用されるいずれかのファンド（文脈に応じて、パラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ピークル又はオルタナティブ投資ピークルと併せて「SB ファンド」）のリミテッド・パートナーシップ持分又は同等の有限責任持分の販売の申込み又は申込みの勧誘を行うものではなく、また、いかなる方法でもそのように依拠してはなりません。疑義を避けるために付言すると、SB ファンドは、他のファンド同様、SBIA とその関係会社によって運用されている SoftBank Vision Fund L.P.（文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ピークル又はオルタナティブ投資ピークルと併せて以下「ビジョン・ファンド 1」）、SBGA とその関係会社によって運用されている SoftBank Vision Fund II-2 L.P.（文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ピークル又はオルタナティブ投資ピークルと併せて以下「ビジョン・ファンド 2」）及び SBGA とその関係会社によって運用されている SBLA Latin America Fund LLC（文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ピークル又はオルタナティブ投資ピークルと併せて以下「ラテンアメリカ・ファンド」）を含みます。

SB ファンド（ビジョン・ファンド 1 及びビジョン・ファンド 2 並びにラテンアメリカ・ファンドを含む）、SB ファンド運用会社、SB ファンド運用会社により運用される後続又は将来のファンド、SBG 又はそれぞれの関係会社のいずれも、本資料に記載されている情報の正確性又は完全性について、明示又は黙示であるにもかかわらずこれを表明又は保証するものではなく、また、本資料に記載されているパフォーマンスに関する情報は SB ファンドその他本資料に言及される企業の過去若しくは将来のパフォーマンス又は SB ファンド運用会社により運用される後続ファンド、将来組成されるファンドの将来のパフォーマンスについての確約又は表明として依拠してはなりません。

SB ファンドその他本資料に言及される企業のパフォーマンスに関する情報は、背景説明のみを目的として記載されるものであり、関連する SB ファンド、本資料に言及されるその他のファンド又は SB ファンド運用会社により将来運用されるファンドの将来のパフォーマンスを示すものとして考慮されるべきではありません。SB ファンドの特定の投資対象に関する情報への言及は、それに含まれる範囲において、関連する SB ファンド運用会社の投資プロセス及び運用方針を説明することのみを目的として述べられたものであり、特定の投資対象又は証券の推奨として解釈してはなりません。SB ファンドのパフォーマンスは各個別の投資においてそれぞれ異なる可能性があり、個別に言及した取引のパフォーマンスは、必ずしも全ての適用される従前の投資のパフォーマンスを示唆するものではありません。本資料において記載及び説明される特定の投資は、関連する SB ファンド運用会社が行う全ての投資を示すものではなく、本資料において記載及び検討される投資が利益を生んだ又は将来利益を生むと仮定すべきではありません。

本資料に記載される SB ファンドのパフォーマンスは、ポートフォリオ投資の未実現の評価額に基づくものです。未実現の投資評価額は、関連する SB ファンド運用会社がそれぞれ特定の投資に関する状況に基づき合理的とみなす前提及び要因（例えば、評価日現在における類似の会社の平均株価収益率その他勘案事項等を含みます。）に基づくものです。しかしながら、未実現の投資評価額が本資料に記載されている金額又は本資料に記載されているリターンを算定するために用いられる金額で実現されるという保証はありません。また、かかる実現に関連する取引費用が未知であるため、当該取引費用は、かかる算定に含まれません。未実現額の見積りは、常に変化する多くの不確定要素の影響を受けます。関連する SB ファンドの未実現の投資に対する実際の実現リターンは、いくつかの要因がある中で特に、将来の運用実績、処分時の資産価格及び市況、関連する取引費用並びに売却の時期及び方法によって決まるものであり、これらの要因は全て、関連する SB ファンド運用会社の評価の根拠となった前提及び状況と異なる可能性があります。

過去のパフォーマンスは、必ずしも将来の実績を示すものではありません。SB ファンド又は SB ファンド運用会社により運用される将来のファンドのパフォーマンスは、本資料に示されるパフォーマンス情報よりも大幅に低くなる可能性があります。各 SB ファンド又は関連する SB ファンド運用会社により運用されるいずれか将来のファンドが、本資料に示される実績と同等の実績を達成するという保証はありません。

本資料に記載される第三者のロゴ及びベンダー情報は、説明目的のためにのみ提供されるものです。かかるロゴの記載は、かかる企業又は事業との提携又はその承認を示唆するものではありません。SB ファンド運用会社、SB ファンドのポートフォリオ会社、SB ファンド運用会社により運用される将来のファンドの将来のポートフォリオ会社、又は SBG が、本資料に記載されるロゴを有する企業又は事業のいずれかと今後業務を行うという保証はありません。

SBGA 及び SBIA は、ビジョン・ファンド 1、ビジョン・ファンド 2 及びラテンアメリカファンドの運用に関して、相互に SBG からそれぞれ別個独立した業務プロセスを採っています。SBGA 又は SBIA によって運用される SB ファンドは、それぞれ SBGA 単独又は SBIA 単独で運用されています。

質疑応答

質問者 1: 二つあります。ChatGPT について、かなり前向きに見ていらっしゃるようですが、昨日、ソフトバンク株式会社（以下「SBKK」）の宮川 潤一（以下「宮川」）社長も 3 月に JV を作ったとおっしゃいました。ソフトバンクグループのお考え、戦略をもう少し詳しくお聞かせください。

二つ目の質問は、攻めにいくとおっしゃいましたが、今四半期中に投資を再開するというのでしょうか。もし今四半期でなければ、いつ頃になりますでしょうか。

後藤: ChatGPT を中心とする生成系 AI への取り組みについては、昨日宮川もだいぶお話をしたようで、はらはらしながら見ていましたが、われわれもまだ始まったばかりです。孫が決算説明会に出なくなって半年ぐらいになりますが、彼が水面下でわれわれ以上に忙しく何をやっているかという、アームのビジネスモデルの追求もそうですが、アームのチップというのは AI に不可欠なものですよね。

ですから、アームに取り組むこと自体が、グループ全体として AI をリードすることに当然つながっていくわけです。この数カ月、こういったサービスがかなりのスピードで世の中に広まってまいりましたが、われわれはわれわれで、こういうことを予測しつつ、それをどういうビジネスに展開できるのかということを実際に考えているわけです。

ですから、今皆さんも使えるようになっている生成系 AI にだけ絞っているわけではなくて、われわれはもっと大きな視野で見えています。

ソフトバンク・ビジョン・ファンド（以下「SVF」）を始めたときに、さっきご紹介した、AI は全産業を再定義するのだと申し上げました。それがいざ具体的に、皆さんにも伝わるような時代になってきていますから、その中でわれわれはどのような企業群と、どのようなアライアンスや投資などを組み合わせながら、ソフトバンクグループとしての成長をこれから実現していくのかと。そこが大事なことだと思っています。

例えば、会社を作ったという話も宮川がしていましたけれども、まだ作っただけの話で、今すぐ大きな話になるということではありませんので、取り組みの姿勢として見ていただければと思います。昨日 SBKK からさまざまな説明がありましたが、もちろんこの上には孫がいるわけです。孫がグループ全体に対して、このテーマにどう取り組んでいくのか、動いていくのか。間もなく株主

総会がございます。株主総会でたぶん、孫が話せる範囲で話をするのではないかなと思っています。まだ話す内容は決まっていないと思いますが、ご期待いただければと思います。

二つ目の質問はナブニートさん、お願いします。

ナブニート・ゴビル（以下、ナブニート）：投資活動について、後藤が申し上げたように、この1年間守りの姿勢で、投資はあまりしていませんでした。非常に的を絞って、選択してやってまいりました。新しい、魅力のある投資機会があれば、引き続き投資してまいります。

質問者 1：どれぐらいの規模になるのでしょうか。

ナブニート：これは機会によります。非常に魅力的な機会ということであれば、相当な投資をすと思います。投資機会、それから、AIを生かせるかどうかというところにかかってきます。非常にいいテクノロジーで、経済的にもいい、スケールアップが期待できるということであれば、投資機会によっては、かなりの規模で投資したいと思います。

後藤：少し補足しますと、1年間で5兆円近く投資したときというのは、ある意味、総張りに近かったのです。総張りというのは、AIの可能性がありそうな企業に、できるだけ多く面を取りにいく投資のスタイルを取ったのです。ただ、私たちは今、厳しい環境にいるわけです。財務的な安全性という、しっかりした制約の中で、非常に絞り込んだ選別をしていく時期なのだろうと思います。

ですから、いきなり攻撃開始でどんどん攻めるぞということではなくて、しっかりといいものを見極めていく。そういう1年になるのだろうと思います。

質問者 2：2点あります。1点目はアリババについて、足元の株式保有割合と、そのうち先渡売買契約にどの程度出していらっしゃるのかを教えてください。今後は株式による決済で、事実上、すべて売却したという認識でよろしいのでしょうか。

後藤：実際には、株式のすべてを先物取引などの契約の中に織り込ませました。細かいところを言うと、資金調達に使用していない株式は少し残っているのですが、全体感のお話をすると、すべての株式を資金調達に活用しています。手元に残っている株式は、やがて1年後、2年後の決済の時点で、現金もしくは株式で決済を行うことになろうかと思っています。

質問者 2：もう1点、クレディ・スイスが、SVFの投資先のグリーンシルを巡って訴訟を提起しました。これに対する御社の受け止めをお聞かせください。

後藤：これは、残念というか、クレディ・スイスは、もともと私どもと本当に親しい金融機関であったわけで、グリーンシルは、SVF の投資先でもありましたし、クレディ・スイスからすると、ファイナンス取引の相手方として、それぞれ良好な関係だっただろうと思います。

今回、彼らから起こされている訴訟というのは、彼らはお金を貸す仕事ですから、言い方を変えると、A さんに貸したお金が返ってこなくなったから、B さん、代わりに返せと言っているのに近い話なのです。

グリーンシルという会社は、われわれの投資先として、かなり厳しい環境に直面していると理解をする時期もあり、そういう時期に彼らの財務をサポートしながら、彼ら自身がターンアラウンドして、成功してくれればということで、追加の資金を出した時期があります。彼らの転換社債を引き受ける形で資金を約 4 億ドル、彼らに投資をしたわけです。

グリーンシルとしては、その資金を返す予定があったと思います。返すべきだったと思いますが、そのお金は返すべき対象に渡らなかったというのが現実だと思います。ただ、われわれはそこについて何か責務を負うわけではなく、このグリーンシルという会社が立ち直ってくれればということで、言ってみればリスクを取って、資本投下したわけです。

クレディ・スイスが言っているのは、その金が自分のところに返ってこなかったから、「それはおまえらが悪いのだろう」という話で、われわれとしては何を言っているのだという話なのです。われわれも、3 年ぐらいかけて、法務も綿密な調査をして、対抗レポートも書いていまして、これから何年かかるか知りませんが、われわれが負ける要素は現時点で見当たらない案件だと思っています。

こういうことを起こされていることが非常に悲しいですね。大変親しい金融機関ただだけに、なぜこんなことになるのかというのが、われわれとしては悲しい。彼らとは特に、アジアパシフィックで、本当にさまざまないい取引を 20 年ぐらやってきた相手ただだけに、会社としての経営問題から、こういった方法的なアクションも起こさざるを得ない何か事情もあるのでしょうけれども、それはわれわれには関係ないことです。

本当にわれわれにとっていわれのない訴訟を受けているところですから、勝つのは間違いないとして、こういったレピュテーションで負けることは、私は徹底的に排除しようと思っています。ですから、例えば、先方からさまざまな臆測的な記事だとか、そういうものが出たときに、われわれはしっかりそれに対する反論を都度、明確にしていきたいと思っています。こういったところで、世の中に対する情報の出し方みたいな、戦い方で負けるというのは、われわれとしてはあり得ないことだと思っています。

ぜひ皆さまにもご支援いただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

質問者 3：2023 年度は守りと攻めの両立を掲げるというお話でしたけれども、具体的にどのような局面が来たらアクセルを踏むというか、攻めに転じるとお考えでしょうか。

後藤：赤信号で止まっていて、青になったら、さあ、アクセル踏んで行くぞと、こんな感じではないわけです。こんな厳しい環境だけれども、こういうアライアンスはやったほうがいいのか、この会社とはコラボレーションしたほうがいいのか、もしくはこういうテーマについてはわれわれ自らがオペレーションを含めて検討してみたらいいのではないかと、そういうことを前向きにやりだすタイミングなのです。

信号がない交差点をどうやって渡るかな、という感じではないかとは思いますが。私たちの手元に、そういう投資の具体的なパイプラインがあるわけではありません。でも、出てきたときには、今年はずっとちゃんと検討しよう。よっぽどのことがない限りは、今年は厳しいから見送ろうというのがこれまでの 1 年間でした。

今年はずっとちゃんと財務のチェックは私たちのチームでやりながら、このくらいまでのレベルだったら安全だよ、そのぐらいの話だったら大丈夫だよというところをちゃんとチェックしながら、少しずつでも取り組んでいきたいというスタンスです。いきなり青信号でどんと進むという、そういうことではないです。

質問者 4：二つお伺いしたいのですが、なぜ御社は OpenAI に出資していなかったのか。話はあったけれども、断ったのか、そもそも視野に入っていなかったのか。その辺について教えてください。

後藤：基本的にはコメントしませんが、もちろん、存じ上げていました。現実には投資はしていませんでした。投資の意思決定のプロセスとか過程の話ですのでノーコメントです。

質問者 4：二つ目は事実確認なのですが、シリコンバレー銀行について、2000 年に御社が日本債券信用銀行を買収したときに、シリコンバレー銀行を巻き込んで買収したという経緯がありましたが、その後シリコンバレー銀行と御社の資本関係を含めて、関係というのは何かあったのか、続いていたのか、教えてください。

後藤：まず結論として何もございません。確かに今回、懐かしい名前が出てきたなという思いはありまして、私もソフトバンクに入って最初の仕事が、日本債券信用銀行の買収プロジェクトだったものですから、本当に懐かしい名前だったのですが、こういう形で残念だなとは思っています。

質問者 5：決算短信の 7 ページ目でウィーワークに対して 6,000 億ぐらいの損失を出していると思うのですが、その点に関する後藤さんの受け止めをお聞かせください。また、現状でウィーワークへの SBG グループとしての出資比率はどのような状況なのでしょう。

後藤：まずウィーワークへの投資に対する、私の受け止めといたしますか、会社としての受け止め方ですけれども、当初、投資してから、急成長を見込みながら挫折した銘柄、そして、その段階でわれわれは、投資先への救済的な支援というのはこれが最後だということで、ウィーワークに対して財務サポートのプログラムを提供したわけですね。

ぜひ回復してほしいと思ったらコロナが来て、彼らの的にも非常に厳しい環境、不動産業界全体が厳しい状況になる中で、彼らも必死にやってくれていると思います。彼らのパフォーマンスはまだまだ苦戦はしていますけれども、今後の彼らの回復に本当に期待をしたいと思っています。ナブニートさん、どうでしょうか。

ナブニート：ウィーワークは上場企業で、われわれはインサイダーなので、限定的な情報しか提供できません。また、ウィーワークは 5 月 9 日に決算がありました。そのときの情報をご確認いただければと思います。

後藤：経済的持分は、いろいろなリストラクチャリングなどをやっていますけれども、だいたい 7 割ぐらいです。

質問者 5：関連会社のままというのは、何か理由があるのでしょうか。決算短信では関連会社ということで、子会社にはならないと。

君和田 和子（以下、君和田）：はい、その区分で言えば関連会社です。

後藤：君和田が答えた通りですが、議決権ベースでいくと 5 割を切っています。

質問者 6：生成系 AI の投資に関して伺いたいのですが、どういう AI に投資をしますかというのが質問の主旨です。当然、投資会社なので、パフォーマンスが一番だと思うのですが、釈迦に説法で恐縮ですが、期待がある一方で、課題や懸念も出ています。

先日の G7 閣僚会合でも、民主主義だとか、人権だとか、その基本的な価値観についてのメッセージというものも出ていました。御社として、パフォーマンス以外での投資に関わる AI というのはどういうものを望まれるのか、お考えがあればお聞かせください。

もう 1 点目ですが、攻めの姿勢という形で、生成系 AI のことを中心に述べておられましたけれども、投資再開というのは、まず生成系 AI からという理解なのか、生成系 AI も含めて、ほかの投資対象も探していくということなのか、教えてください。

後藤：二つ目のご質問からまいりますと、生成系 AI だけに投資するというメッセージではありません。AI リレーテッドな中で、われわれが今年許容できる範囲内での投資を考えていくということです。ですから、スピードもそんな早くはないと思いますし、しっかり選んでいかなければいけないと思っています。

では、その先どういうものが投資対象かというのは、まだ語るには早いと思っています。生成系 AI が世の中で使われだしたときに、どういう産業が革命的に変化するかとか、われわれのライフスタイルですね。われわれの会社の別の呼び名って、ライフスタイル・カンパニーという名前なのですよ。

ですから、そこはすごくこだわっています。人々の暮らしの中にどういう革命的变化が起こるか。ソフトバンクを最初に起業したときもそうですし、あのとき、どこにもソフトウェアのパッケージをアグリゲートする会社なんかなかったわけです。それだけ皆さん個人の手元に届きやすいような仕組みを作ったつもりなのです。

それから、まさに 90 年代後半、インターネット、それから、ブロードバンドへの流れも同じことでしたね。iPhone もそうです。そういうヒントからわれわれが今度、何を目指すかというのは、ぜひ想像していただきたいなど。またお話できるときには、私より偉い人がお話をするとします。

質問者 7：孫さんは、技術の先を読んで、仕掛けて、待つというビジネスモデルでずっと成功されてきています。今の孫さんの AI に対する高揚感というのでしょうか、実際どれぐらいこれを追い風と捉えておられるのか。

後藤さんが孫さんと接せられて、もし孫さんがここにおられたら、どういう言葉で今の現象を話されるのか。もちろんリスクはあると思います。その辺のところは株主総会で、とおっしゃいましたが、やはり少しお話しいただきたいです。

後藤：あまりしゃべると孫に怒られそうですが、彼の中の高揚感というのはとにかく凄まじいものがありますね。この半年間で考えても、半年前ってこの生成系 AI ってここまで世の中、日常的にまだメディアにも出ていない時期ですね。

そのときですら、やりたいことが山のようにあって、どれから手をつけていいのだというぐらいの状態、彼いわく、俺は会社創業期の自分に戻ったつもりだと。その気持ちで、今、あらゆるものを見直しているということをしていましたし、本当、寝られているのかなと心配するぐらいですね。それが特にこの数カ月の生成系 AI の急速な、等比級数的な発展で、彼はもうまさに俺の時代が来たという感じでございます。

彼の熱量は、私の控えめな性格ではうまく表現できませんけれど、毎日一緒にいるこっちが倒れないように苦労するぐらいでございます。

質問者 8：ウィーワークについて1点、アリババについて1点お伺いします。まずウィーワークですが、決算短信7ページに、6,000億円の追加損失を出されたということで、過去の損失もあったと思うのですが、累積の損失が総額どの程度になったのか教えてください。

それから、4月以降の変更ということで、債券の株式化、転換社債への交換をされていると思うのですが、これがSBGの第1四半期決算にどういう影響を与えるのか、お聞かせください。

君和田：投資については、だいたい1.1兆円、110億米ドルぐらいですかね。そのうち今残っているのが、4億米ドル弱ぐらいかなと思います。それ以外の補償に関する損失というのは、ほとんどの金額が22年度の後半、第4四半期に計上されているものです。

質問者 8：累計の総額の損失はどの程度になっているのか、数字で教えてください。

君和田：ウィーワークの累計の損失ですが、株の関係は115億米ドル、引き当てで9億米ドル、累計で124億米ドルです。

質問者 8：アリババについて、この20数年間、アリババ株式の存在がものすごく大きくて、今、ほぼ全部資金化されたということですが、ソフトバンクグループがこれだけ投資会社化したのも、アリババ株式のおかげだと思います。あらためてこの20年間の総括をお聞かせください。

後藤：投資のパフォーマンスとして、今見ていただいているような数字は、歴史的にもなかなかないような、すごいパフォーマンスをわれわれにもたらしてくれた大変な友人です、ジャック・マー（以下「ジャック」）はわれわれの役員も長く勤めてくれました。本当にさまざまな気づきを与えてくれました。

それから、中国という国のさまざまな難しさがある中で、彼がその橋渡しとなって、さまざまな経験をすることもできました。また、アリババがスタートしたときって、本当にまだこれからどういうビジネスモデルにしようかというところから、われわれと一緒に考えてきた歴史があるのですね。孫が考えているビジネスモデルを、中国という巨大なマーケットの中でやってみたらどうなるのだろうかという仮説を立てて、それを誰よりも早く実行する力があったのが、ジャックなのです。

だからこそ、これだけのグループになれたのだと思うし、20年間を一緒に走って共有できたということ、私も十何回、中国アリババの本社や、彼らのエリアに訪問して、いろいろな気づきもいただきました。感謝しかないです、ただ、これで終わりではないです。われわれは資本関係ですべて

を語るグループではなくて、群戦略です。ジャックやアリババグループとは、今後もいいグループであり続けたいと思っています。

質問者 9：先ほどプレゼンテーションの中で、不安定要素は、間違いなく地政学リスクだとおっしゃっていました。こちらに関しては解決方法も見つからない状況だとおっしゃっていたかと思うのですが、解決方法がない中で、このリスクに対しては具体的にどう対応していくのか。地域的な分散というのは、先ほどプレゼンテーションの中でもすでにされているということなのですか。今後、このリスクがどんどん拡大していく中で、御社としてはどんなことができるのか。あと、このリスクは御社にとってどこに顕在化するのかをもう少し具体的に教えてください。

後藤：やはり、世界中のさまざまなサプライチェーン自体の分断まで起こしてしまうような、ロシアによるウクライナ侵攻。性善説に立って、経済のサプライチェーンを作ってきたわれわれ、世界の経済人にとって、こういうことが起きるのだという経験をされたと思います。これはエネルギーだったり、食料だったり、半導体だったり。そして、これがマーケットの状況に大きな重しとして、今、ぶら下がり続けているわけですね。

もちろん人類の叡智がこういった紛争を解決すると信じているのですが、そこに至る過程では、まだまだ厳しい状況があるかもしれません。例えば、マーケットの大幅な下落というリスクはあるのかもしれませんし、われわれはアセットのさまざまなセンシティブスタディをやっています。今のアセットが5割減になったらどうなるのだと。でも、5割減になっても実は安全ということも分かっています。

そういった計算をしながら、相当なリスクに際しても対応できるような、構えを作る範囲内での投資活動、そこはやっていきたいなと思っています。ですから、その前提を組み立てる上で、リスク量をどうやって、われわれの社内でそれを定量化して、きちんと一つ一つのビジネスジャッジメントに生かせるかが大事だと思っています。米中問題や、その周辺へのリスクももちろんあるのですが、一番大きな問題というのは、今ロシア問題じゃないかなと思っています。

質問者 10：一部報道でも出ているのですが、フォートレス売却の交渉について、現状、そして、今後どのような形で発表されるのかをお聞かせください。

もう1点が、昨日SBKKの宮川さんがお話しされていた内容について、今後、和製GPTの構築も目指していきたいという話をされていました。新会社にはSBGも関わっているかという話が先ほど出ましたが、和製GPTの構築に向けた、今後の方向性についてお聞かせください。

後藤：まずフォートレスの記事は私も見たのですが、ノーコメントとなりますのでよろしくお願いいたします。

それから、昨日のさまざまな発言については、宮川の説明の言葉の中でご理解いただければと思っています。さっき、私に対するご質問の回答もしましたが、何分、この2~3カ月で起きている話です。会社を作るとか、日本でとか、いろいろな話は本当にまだこれからです。

ただ、これからなのですが、当然この動きの中で、宮川や通信会社のSBKKだけで動いているわけではなく、孫を初めとするグループの叡智を合わせて成功に導いていきたいと考えております。本当にこれからです。よろしくお願いします。

質問者 10：最終的に目指していく方向性について、もう少し具体的に、どんなものを目指しているのか、何か形づいたものがあればお聞かせください。

後藤：乞うご期待ということで、よろしくお願いします。